

令和5年度

中学生の広島市平和記念式典への派遣事業感想文集



藤 枝 市

令和5年度 広島市平和記念式典派遣中学生

No.	学校名	氏名
1	藤枝中学校	寺田 眞悠子(てらだ まゆこ)
2	西益津中学校	四條 美陽(しじょう みはる)
3	青島中学校	小川 凌空(おがわ りく)
4	高洲中学校	工藤 莉美(くどう りみ)
5	大洲中学校	増田 野々香(ますだ ののか)
6	瀬戸谷中学校	澤口 風花(さわぐち ふうか)
7	広幡中学校	向坂 龍之介(むこうざか りゅうのすけ)
8	青島北中学校	澤瀬 巧汰(さわせ こうた)
9	岡部中学校	池谷 有敬(いけや ゆたか)
10	藤枝順心中学校	鈴木 天寧(すずき あまね)



原爆ドームにて

「生き残ってくれてありがとう。命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」これは、広島市平和記念式典でこども代表による『平和への誓い』の一節です。私は記念式典に参加させていただき、この言葉に愕然としました。日常を奪われ家族や友人を一瞬にして亡くした方たちが七十八年間絶望の中、生きる意味を探しながら生活されていたことを知ったからなのです。だからこそ、私たちには、命を繋いでくれた先人への感謝の思いを形にする使命があるのです。そのためにもまず、核兵器の無意味さを世界に伝え、同時に多くの命を奪う兵器も無くしていくよう訴えていきたいです。そして、一番に考えたいのは、なぜ人はお互いの価値観のズレや考え方の違いを力によって解決しようとするのだろうかということです。私たち若い世代が中心となり、この答えを探していかなければならないと強く思いました。



藤枝市平和祈念式典にて感想文を朗読

私は広島のみちや授業などで学んだ原子爆弾投下の出来事に関心を持ち、この活動に応募しました。そして私にとってこの二日間はとても考えさせられる日となりました。

平和記念資料館では、今では考えられないような写真や絵・物がありとても胸が苦しくなりました。原子爆弾という卑怯な手を使い何もしていない人々の命が一瞬にして奪われた。そんなことはこれから先二度とあってはならないと強く思いました。

六日に行われた平和記念式典にはたくさんの外国人も参列されていて、日本は世界で唯一の被爆国でそれはとても大変な出来事だったということを改めて実感しました。

この二日間で私はこれから生きていくにあたって大切なことをたくさん学ぶことができました。人を尊敬し思いやる。「ありがとう」の一言を言う。こんな少しの行動で平和はつくられます。私はこれからも相手のことを思って行動していきたいと思えます。



広島市平和記念式典に参加

僕が広島に行って感じたことは、平和の大切さと核兵器の恐ろしさです。核兵器の恐ろしさを目にする機会はありませんでしたが、資料館で目にした光景は想像を遥かに超えるものでした。原爆により大やけどを負った人の写真、山のようにつまれた死体の写真などがありました。この写真を見て僕は、いたたまれない気持ちになり、原爆の恐ろしさを改めて痛感しました。広島で起きたこの悲劇は人の命だけではなく思い出や幸せな日常をすべて奪っていきました。

僕が一番感じたことは、当たり前前に過ごしている今日は、どれだけ幸せなことかという事です。原爆が落とされたあと広島では大勢の人が亡くなり、生きようと思っても今日を生きることでも精一杯の人も多くいました。だから今僕たちが今日を元気に過ごしているという事は本当に奇跡で決して当たり前ではないという事に気づきました。

戦争体験者が減っていて、戦争を語り継ぐ人が少なくなってきた今、僕たちにできることは戦争の事実を知り、知ったことを非体験者の人たちに伝えること、伝えることで非暴力の平和な世界につながると思いました。そしてこの悲惨な出来事を決して忘れてはいけないと強く思いました。

僕はこの貴重な体験を通して、まずは僕の周りの家族や友達のことを大切に、一日一日を一生懸命生きていくことが、今の僕にできることだと思いました。



藤枝市平和祈念式典にて
感想文を朗読

原爆ドームは観光地というイメージがあった。一惨めな事実を知る前のことだ。

私たちは、原爆ドームを見た後、平和記念資料館を視察した。そこには、原爆によって亡くなった方の遺品や、当時の様子の写真などが展示されていた。私は、どこか心が抉られるような気持ちになった。

核の脅威を知った翌日、広島市平和記念式典に参加した。代表者の言葉や献花、献水などからは、恒久平和を願う思いの強さが深く感じられた。会場からは、原爆ドームが見えた。前日に見たときとは、何かが違った。まるでヒロシマの「あの日」の情景が伝わってくるようだった。

七十八年が経っても、苦しみは消えず、薄れることもない。誰もが笑顔で過ごせる平和な社会に向けて、一人一人が意識を高める。それが、現代において最重要だと私は思う。



大和ミュージアムを見学

一九四五年八月六日、広島市に世界で初めての原爆が投下された。無差別に多くの命を奪い生き残った人々の人生も大きく変えられた。

まず、原爆ドームへ足を運んだ。これは、かつての状況を聞かせるだけでなく、目で見て原爆の悲惨さを少しでも分かってもらえるように後世に残して伝えるための遺跡だと汲み取ることができた。

平和記念資料館では、被爆者の方々が亡くなってしまった原因や想いがたくさん展示されていた。亡くなり方は様々で亡くなる一週間前から鼻血が出たり髪の毛が抜けたり赤い斑点が体中に出て、亡くなる寸前に意識が確かなまま口から血を吐きながら、亡くなってしまおう方もいた。それとは反対に、二年後、三年後に突然亡くなってしまおう方もいた。長い年月を経て亡くなってしまった方の中には後遺症と戦って亡くなった青年もいた。その青年は、教授になりたいという夢があった。「原爆の後遺症があっても勉強をして留学したい。」という強い意志があったがそれも叶わぬまま空へ旅立ってしまった。

この時代は勉強がしたくても、ただただ家族と過ごす日々を送りたくても、友達と一緒に学校に通いたくても、そんな何気ない日常が当たり前前に送られていなかったのだと改めて分かった。だから私は、今当たり前のように学校に通えていること、当たり前のように友達と一緒に笑いあっていること、当たり前のように家族と一緒に生活できていることを感謝しなくてはいけないと思った。

これからは、一つ一つの物事に全力で取り組み、もっともっと戦争や核兵器の怖さを伝えていきたいと思った。



今回の体験を多くの先輩、後輩、同級生たちに伝えていきたいと思った。

原爆ドームでは、現地に行ってみないとわからない迫力がありました。崩れた壁、落ちている破片。周りのビルやマンションの風景からは考えられない程の有様でした。「こんな大変なことがあったんだ。」と原爆ドームが言っているようでした。

原爆の資料館にも行きました。そこには、放射線によってどろどろになった人を描いた絵や後遺症によって苦しんでいる人々の写真。放射線を浴びた物。他にも言い切れないぐらいの物が展示してありました。たった一発の爆弾によってこんなにも人を殺し、物を破壊し、生き残った人々をどれだけ苦しめたかが展示物から伝わってきました。

これからも広島であったことを後世に繋げていくためにまずは学校の友達に広島に行って感じたことや分かったことを広めようと思いました。



広島市平和記念式典に参加

私は今回の派遣で強く印象に残ったことが2つあります。

1つ目が、原爆の悲惨さです。破壊され、ボロボロになった建物、ケロイドに身を包まれた人、最愛の家族を無くし、狂乱する人。街や身体だけでなく、生き残った人の心にも刻まれた惨い傷は、今でも生々しく伝えられています。私は、正直、これほどの凄惨さとは想像もついていませんでした。今まで一人の出来事を文章や作品として習うことはあっても、街全体に目を向け、写真なども使って習ったことがなかったからです。しかし、今回の派遣で、それを目の当たりにし、いかにそれが非人道的行為であったかを思い知りました。

そして2つ目は、今の日本の平和なことです。今や広島には観光地もあり、街も発展しています。今まではそんな平和さも当たり前のように感じていましたが、平和とはとても価値のあるものだな、と感ずることができました。

私にとって今回の派遣は、これからの日本にもこの事実を伝えていき、平和を守る人の一人でありたいと思えた、とても貴重な経験でした。



平和記念公園にて

僕は、戦争を経験した人が減っていく中で僕たちのような若い世代が戦争について伝えていかなければいけないと思い、広島へ行って当時の事を勉強したいと考え、今回の広島平和記念式典へ参加しました。

まず一日目は、平和記念公園へ行きました。原爆ドームを観たとき、一つの爆弾で一瞬にして街がこうなってしまったと考えると、核兵器のおそろしさを身に染みて感じました。広島平和記念資料館では、原子爆弾について、その爆弾が落とされる前と落とされてからの広島について学びました。被爆した建物や、切れ切れになった子どもの洋服、残された家族の言葉などを見ていると、胸が苦しくなりました。資料館から出てくる人たちの表情は、みんな何か考えこんでいるように見えました。いろいろな国籍の人がいましたが、平和を願う気持ちはみんな同じであるといいと思いました。

二日目、原爆の恐ろしさを学んだ後に式典に参加したことで、式典で話された言葉一つ一つが心に響きました。そして核兵器のない世界を実現することの大切さが分かりました。

移動中に「平和って何だろうね?」と聞かれました。たった一つの爆弾で広島の人たちの当たり前の日々が失われてしまいました。だから僕は平和とは、当たり前の方が当たり前ができる、みんながふつうに生活できるという事だと思います。朝起き、学校に行き、勉強をして、家に帰ってごはんを食べる、そんな当たり前の日々がずっと続いたらいいと思いました。

この八月五、六日に広島に行くことができたことは僕にとってすごく意味があり、貴重な経験になりました。この二日間で学んだことを、家族や友達や周りの人たちに伝えて、どうしたら平和な日々が続いていくかを、これからみんな考えていきたいと思っています。



平和記念公園にて

僕は、今年、代表に選ばれ広島に行くことができました。「代表として行かせてもらえるんだ。」という光栄な気持ちで向かいました。二日間、広島を訪れ、一番印象に残ったことは、原爆ドームを見たことです。

原爆ドームは、テレビでしか見たことがなかったのですが、実際に見てみると、生で見た原爆ドームは別物で、原爆によってドームの天辺が鉄骨で丸裸になってしまった悲しげな建物だと僕は感じました。今から七十八年前、広島は原爆を落され、多くの建物が破壊され、人々は、多いに苦しみ亡くなりました。そんな中で唯一、原爆ドームが残ってくれたおかげで、広島の人々を始め、日本から、世界へ戦争や「核」の恐しさを伝えていけることができ、平和を歩んでいくことこそが必要なんだと僕に伝えてくれました。

今、平和へ歩もうとする人々とは逆に、ロシアのウクライナ侵攻を始め、戦争を起こす人々があり、核兵器を持ち、使用への緊張が高まっています。平和を長く保つためにも僕たちにもできることがあります。

まずは、周りの友達や先生、家族との仲を深めることから小さな平和を少しずつ生み出せます。



このように、日本に住む僕たちだからこそ、戦争、「核」について世界に伝え続け、戦争、「核」の悲劇が忘れられぬよう、真実を受け入れ、次の世代へと伝えていくことで、平和を少しずつ作っていけると僕は、広島に行って感じるようになりました。

広島市平和記念式典に参加

原爆資料館で戦争の犠牲になった人々の言葉、写真、遺品を見つめているとつらく悲しい気持ちがこみ上げてきました。明るく平穏な暮らしを一発の爆弾で一瞬のうちに奪われてしまった事が伝わってきました。決して繰り返してはならない歴史です。そのために、この核廃絶に向けて自分が今出来ることを考えていきます。戦争が始まり、核が作られた経緯、核の持つ力について知ることから取り組みます。

また、周囲の人に実際に広島で感じた事を伝え、関心を広めていく様にします。戦争の体験者が減っていく中、最も怖いのは平和に対する無関心が生まれ行く事だからです。記念式典での小学生の誓いの言葉の様に自分事として世界の平和を受け止め、七十八年経っても核の危険性は変わらず今も有る現実をあってはならない事だと認識し、伝え続けて行く事を約束します。どの国も暮らしや大切な人を守るために、核におびえる日がなくなる事を目指していきます。



原爆ドームにて



広島市平和記念式典に参加



平和記念資料館を見学



藤枝市平和祈念式典にて
感想文を朗読

令和5年度中学生の広島市平和記念式典への派遣事業感想文集

発行：令和5年8月

静岡県藤枝市岡出山一丁目11-1

藤枝市総務部総務課